
現代語訳 竹取物語

行野羅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代語訳 竹取物語

【Nコード】

N9254N

【作者名】

行野羅月

【あらすじ】

竹取の翁が竹林の中で見つけた光る竹を切ったところ可愛い姫を見つけました…お伽話としても有名な「かぐや姫」の原文を現代語でわかりやすく翻訳しました。

<1> かぐや姫の生い立ち

昔のこと、とある国に竹取りの翁と呼ばれる者がおりました。

本来、「さぬきの造みやじ」という立派な格式を持つ家柄の出でしたが、

今は、野山に分け入り、竹を取り、様々な道具を仕立てる仕事を生業としておりました。

そんなある日、いつものように分け入った竹林の中に、根本の方が光る奇妙なひとすじの竹を見つけました。

気味悪く思いながらも近づいてよく見れば、それは筒の中から光っておりまして。

さらに筒の中を覗き込むと、わずか10センチ足らずのそれはそれはとても美しい人がいたのです。

翁は言いました。

「わたしが、朝に夕に毎日見てきた竹林の中だからこそ、見つけることができたのだ。我が子とすべき人に違いない」

そう言うと、両手の中に包み込むようにして、家まで持ち帰りました。

そして、女房に渡すとしつかり養うように言いつけました。

その美しさは、際限が無いほどでした。

ただあまりにも小さかったので、特製の籠に入れ育てました。

相変わらず竹取の翁は、竹を取っていました。

この娘を見つけてから以後、竹を取ると、節の間に金の粒が入った竹を見つけたことが頻繁になりました。

そうして翁は、どんどん金持ちになっていったのです。

この娘を養うと、間もなくすくすくと大きくなりました。

3ヶ月も経つとすっかり年頃の娘と大差ない程になっていましたので、

早速、成人の儀式を執り行い、髪上げをさせ、裳を着させました。

それでも娘を帳台の中から外に出すことはなく、大事に育て続けました。

娘の美貌は、世に比べるものが無く、

娘のおかげで屋敷の中は、光に満たされ、暗い場所は見当たりません。

翁は、気分の悪い時や苦しい時も、娘を一目見るだけで、

苦しみは消え、腹立たしさもすっかり癒されました。

やがて、翁が竹を取ることも無くなりました。

翁は国でも一二を争うほどの有力者になっていたからです。

娘がすっかり大人の女性となったのを見てとった翁は、

三室戸で神事を司る齋部のアキタ氏を屋敷に招き、娘の名付けを依頼しました。

アキタ氏は、《なよ竹のかぐや姫》と名付けました。

こうしてかぐや姫の名付けの酒宴は、屋敷で三日三晩続きました。

そこでは国中のありとあらゆる舞いや踊りが披露され、

国中から貴賤の隔てなく呼び集められた男らが謡い踊り騒ぎました。

<2>

貴公子たちの求婚

世のすべての男ども、高貴なる者も賤しき者も、誰も彼もが、

かくや姫を「どうすれば得られようか」「どうすれば一目お目にかかれようか」と

その名をつわごとのように呼び唱えながら心惑わせておりました。

竹取の屋敷を囲う垣根や、戸口に張り付いて、

屋敷に出入りする使用人たちでさえ、そうそう見られない姫の姿を求め、

夜も心安らかに眠ることなく、闇夜にめげず出かけて行つては、

垣根や戸に穴をほじり、中を覗き見ながら、みな悶々とするばかり。

夜な夜な姫の名を呼ばう男らの有様から、

やがて、そうした輩を指して「夜這い」と呼ぶようになったそうです。

人目もはばからず屋敷の周りをうろついてばかりいても何の手がかりも得られず、

屋敷の使用人に金品を握らせ、なんとか便宜を図ってもらおうとする者もいましたが、無駄でした。

それでも諦めきれない多くの男どもが、竹取屋敷を取り囲み、そのまま夜を明かし、また日がな一日過ごす日々が続きました。やがて、姫への執着が少ない者から順に

「こんな意味の無いことを続けても、良いことは何も無い」とひとり、またひとりと屋敷通いを止めてゆきました。

そんな中でもずっと通い続けたのが、世間でも“色好み”として有名な5人の貴人。

姫への情熱は冷めぬまま、昼といわず夜といわず屋敷へ押しかけました。

《イシツクリの皇子》

《クラモチの皇子》

《右大臣・阿部のミムラジ》

《大納言・大伴のミユキ》

《中納言・石上のマロタリ》

いずれの方々も世間に名の通った地位も名誉もある人物で、

またいずれの方々も、わずかでも「美人」と評判があれば、
どんな月並みな女性であろうとかまわず、

口説き落とし、我がモノにせねば気が済まない気質。

それが全国に「絶世の美女」と評判のかぐや姫であれば、

誰もが何が何でもお近づきになりたいと、寝食を忘れて恋い焦がれ、
屋敷に通い詰めては、機会をつかがい周りをウロウロし続けました
が、

その成果はまったく上がらず終いでした。

恋文を書いても返信はなく、それでも止むに止まれぬ想いを歌にし
たりもしましたが、それでも無しのついで。

そうと知りつつ、霜が降り雪に凍える真冬を過ぎ、日照りや落雷の
酷い真夏になろうと、

彼らはまったく意に介さず、屋敷詣でを続けました。

それでも時々、竹取の翁を呼び出して「私に姫をください」と手を
合わせ拝み倒したりなどしました。

しかし、翁は、

「実の子でないものですから、思い通りにならなくて弱ってるんで
すよ」と言っばかり。

そのついでに時間だけが過ぎていきました。

< 3 > かぐや姫とイシツクリの皇子（前

イシツクリの皇子は、27歳のイケメン王子。

父親は、先々代天皇。母親は、その前の天皇の娘。

世が世なら天皇家のサラブレッドとして、それなりの地位に就いて、おかしくない血筋でした。

しかし、ある年。

異母兄にあたる第一皇子が急逝し、後継者問題が持ち上がりました。

9

その検討会が朝廷で行われた際に、意見を求められた彼は、率直に、第二皇子にあたる、彼の同母兄を強く推挙しました。

ところが、そこで突然、古参の式部卿が激怒し、

「皇子は、先の大乱の過ちをまた繰り返すおつもりか！」

と、居並ぶ高官たちが、全員すくみ上がるほどの怒声で、厳しく糾弾されたのです。

先の大乱とは、彼の父親と、その甥にあたる皇子との間で起きた、後継問題に端を発する内乱の事でした。

その式部卿は、負けた皇子側の当事者でもあったので、その発言の重みと影響力は大きく、

結局、後継者問題は「第一皇子の息子が継承する」という結論に落ち着いたのです。

しかし、その後継者問題の内実は、とっくに上位高官らの間で「決まっていた話」。

ただ、第一皇子の息子が幼少過ぎるため、一部の反発と疑念を生む可能性が、十分考えられました。

そこで、そうした反対勢力の機先を制するために、彼はスケープゴートにされたのです。

それ以来、宮廷でのイシツクリの皇子の評判は、ガタ落ち。

さらに、彼を落ち込ませたのは、良かれと思って推挙した、当の兄からまで批難された事でした。

「お前のおかげで、私まで朝廷で居づらくなってしまったわ。もう、顔を見せてくれるな」

と、絶縁宣言までされてしまったのです。

これは、社会的に抹殺されたも同然の出来事でした。

その悔しさを紛らわすために、彼は自墮落で享樂的な生活に耽（ふけ）りました。

ルックスの良さと口の上手さを駆使して、大臣の娘や侍女、官人の娘、商家の娘など、

手当たり次第に誑（たら）し込んで、恋と歌と踊りに明け暮れる日々を過ごしました。

他人から、「極楽とんぼ」と揶揄されながら、心の中では少しだけ羨ましがられる、

そんな存在でした。

ところが、皇子の内心は、地獄の業火に焼かれるような、苦しみをただれていました。

芸能面を賑わせても、社会面に取り上げられる事のない、名ばかりの皇子。

劣等感と自己嫌悪を隠しながら、色恋沙汰とバカ騒ぎの裏で、

「朝廷に復帰するための“一発逆転”できる有力者の娘をゲットしよう」と必死にあがいていました。

けれど、気は焦っても、思うようなコネは手に入らず、借金だけが膨らみました。

そんな時、耳に飛び込んできたのが、裕福な竹取のオキナの娘、かぐや姫の「お嬢さん募集告知」でした。

竹取のオキナの家は、家格では、まったく釣り合いの取れない相手でしたが、

その無尽蔵とも言われる財力は、借金に苦しむ皇子には、最大の魅力でした。

さらに、オキナが融資する相手は、朝廷全体におよんでいました。

その家の婿に入る事は、朝廷全体を牛耳れるだけの権力を手に入れたも同然。

しかも、居並ぶ朝廷の重鎮らを尻目に、“絶世の美女”かぐや姫を、まんまと??つさらうなら、

社交界の話題独占はケツテ一的。

イシツクリの皇子にとって、これ以上ない完璧なシナリオです。

ところが、成功を目前にして、とんでもない問題が、飛び込んで

きました。

かぐや姫からの難題です。

そもそも《釈迦ゆかりの御石（みいし）の鉢》って、ナニ？

仏教なんか、まったく興味がない皇子には、チンプンカンプン。

その鉢が、どんな形で、どこにあるのか、さっぱり見当もつきません。

そこで、物知りな知人を訪ねて、いろいろと聞いてみました。

「ねえねえ、あのさ、《ミイシのハチ》って、知ってる？」

「そりゃあ、成道祝いに、お釈迦様が、四天王からもらった、アリガタイお鉢の事だよ」

「え？ えっ、ジョードウ？…って、ナニ？」

「成道ってのは、悟りを開いて、仏道が成り立つ事だよ。」

お釈迦様が、死ぬ目に合ったり、気が狂いそうな思いをしたり、

散々苦勞した挙げ句、やっと分かった、人が人として、在るべきために歩む道筋。それが、仏道。

その仏道を信者が説いて回り、多くの人たちが共感し、インドか

ら中国へ爆発的に広がり、

ついには半島の百濟、新羅を経由して、日本にまで伝わったのが、
仏教だよ」

「…ふーん。シテンノーは？」

「その仏教の中で、この世の成り立ちをザツクリ説明する、世界
観ってのがあってね。」

その中心には、須弥山（すみせん）という、恐ろしく高い山があ
ると言うんだよ。

その高さは、約56万キロメートルって、言うからスゴイよね。

地上から100キロで「宇宙空間」だし、月までの距離が38万
キロだから、

それよりもっともっと高い山なんだねえ。

その須弥山の東西南北にある四州を守護する4人の神様。それが
四天王ってワケさ」

途中から、知人がナニを喋っているのか、サッパリな皇子だった
が、知人はそのまま続けた。

「東を守る持国天（じこくてん）、西を守る広目天（こうもくてん）、南を守る増長天（ぞうちょうてん）、北を守る多聞天（たもんでん）。

彼らがそれぞれ一つずつ鉢を、お釈迦様にプレゼントしたんだ。

その4つの鉢を、お釈迦様は一つに重ねて「エイツ」と一つの鉢にしちゃった。

ま、鉢ばかり4つも持っていて、邪魔になるだけだからね（笑）

その後、菩提樹の下でお釈迦様が、お亡くなりになるまで愛用した、たった一つの持ち物。

それが《御石（みいし）の鉢》なんだよ

「ふんふん…ん？ あっ、それで、ど、どんな特徴があるの？」

「特徴らしい特徴って、無いんだよねえ。」

よく見れば、紺青色（こんじょういろ）に光ってるらしいんだけど、

それ以外は、何の変哲もない、黒っぽい鉢みたいなんだよね」

「で、ドコにあるの？ソレ」

「インドのどこか。立派なお寺に奉られているのか、王様の宝物として蔵に眠っているか。」

誰かが持っているのか。いないのか。まったく、分かってないらしいんだよね」

「ふーん。オッケー、分かった。サンキュー」

イシツクリの皇子は、「無駄な事に時間を使う」事を一番嫌いました。

知人の話を聞いて、「見つけるのは、絶対、ムリ」という結論を出した皇子は、

さっそく、《御石（みいし）の鉢》《デッチ上げ作戦に向けて、活動を始めました。

かぐや姫は、イシツクリの皇子からお手紙をもらいました。

「姫からご依頼された、石の鉢を探しに、これからインドへ出発します。待っていてください」

と、書かれていました。かぐや姫は、ニヤリと笑いました。

皇子は、それから1ヶ月後、平民の姿に身を変えて、屋敷を出ました。

京（みやこ）の北東。三輪山のふもとにある山寺に、ソレらしい鉢の噂を聞きつけたのです。

そこには、お釈迦様の弟子たちをかたどった、十六羅漢像がずらりと奉られていました。

その一つ、お寶頭盧（びんずる）様の前に、供物用の鉢が置かれていました。

それが、実にイイ感じに、真っ黒く煤けていたので、住職に言って、安く譲り受けてきました。

屋敷に戻り、それらしい立派な錦の袋を用意して、その二セ鉢を納め、

大事な人への贈り物らしい、造花の枝を添えてみると、

なんだか、グツと本物らしく見えてくるから不思議です。

すぐにも竹取屋敷に行つて、かぐや姫の目の前に、突き出してやりたくまりました。

しかし、インドに行つて、たった1ヶ月で見つけて帰ってきました、なんて、

どう見ても、デッチ上げがバレバレなので、ぐっと我慢しました。

女たちの噂から、計画の露見を恐れて、大好きな女遊びも、ぐっと我慢しました。

ただ毎日、毎日。人目を忍んで、部屋に閉じこもり、

煤けて黒ずんだ鉢を、少しでもツヤが出るように、鹿の皮で磨きながら、

月日が流れて行くのを、一日千秋（いちじつせんしゅう）の思いで、じっと待ち続けました。

そうしているうちに、ふと不安になってきました。

「もしも、この鉢が偽物だとバレたら、どうしよう?」

そうなれば、遠大な未来予想図が、御破算になってしまいます。

人生の破滅です。

そうなった時のための「保険」が必要だと気づきました。

彼は、こっそり屋敷を抜けだして、京（みやこ）の西、金剛山の

麓にある道場を訪ねました。

深い森と滝に囲まれた、広い道場に座って待つ、皇子の前に、

若い修験者らに守られながら、痩せ細った小さな老人が現れました。

「おお。若様も大きゅうなられましたなあ」

「お久しゅう御座います。行者（ぎょうじゃ）様。長いお勤め、苦勞様でございました」

「ううむ。伊豆大島は遠かったのお。この年にはキツイ旅じゃったわ」

島流しにまつわる苦勞話を長々と聞かされる前に、皇子はとつと本題に入ることになりました。

「今日は、行者様にひとつお願いがありまして……」

その老人は、皇子の両親である、先々代天皇とその第2妃様に、ひとかたならぬ大恩のある身。

その可愛い皇子の願いとあつては、聞かないワケにはいきません。

「何でもおっしゃってくださいね。この役小角（えんのおづの）に出来る事でしたら、

鬼でも、蛇でも、何でも呼び出しまして、若様のお役に立ちましょうぞ」

シワに埋もれた目をクシャクシャにして、さも嬉しそうに、老人は申し出ました。

皇子は、《役（えん）の行者》という心強い味方を得て、これからの計画の成功をほぼ確信したのです。

< 4 > かぐや姫とイシツクリの皇子（後

イシツクリの皇子は、満を持して、竹取屋敷を訪れました。

お供は、牛車の御者を入れて、たったの3人。

「お宝目当ての盗賊に、目をつけられないため」と、言い訳をしましたが、

それ以上、人が雇えるお金が無かったのです。

皇子は、少しやつれているように見えました。

目を輝かせたオキナは、立ち上がって出迎え、皇子をいそいそと客間の上座へと誘いました。

2人の従者が、仰々しく担いできた《釈迦ゆかりの御石（みいし）の鉢》の入った唐櫃（からびつ）を、置きました。

オキナは、下座に跪いたまま、錦の袋に包まれた《御石の鉢》をうやうやしく受け取りました。

重みを両手で確かめながら、「さぞ、ご苦勞なされた事で御座いますしょう」と言い終わらないうちに、

オキナは、目いっぱい涙を浮かべ、顔をクシャクシャにしています。

皇子は、ニセ物をデッチ上げた、後ろめたさを微塵も感じさせず、薄い笑みを口元に浮かべながら、軽く首を振ると、

「姫の喜ぶ顔を見るためでしたら、どんな苦勞も厭いませんよ」と、さらっと言いのけました。

「ミカドの血を受け継ぐ私が、直々にインドまで行って、探し求めた品です。よろしく」

身分の違いを突きつけられ、我に返ったオキナは、はじけるように立ち上がると、

「しばらくお待ち下さいませ」と皇子に断って、さっさとかくや姫のいる奥座敷へ下がりました。

皇子は、オキナの引っ込んだ方をジッと見つめながら、

心の中で「姫がニセ物に気づかない」事を祈りました。

もしも、バレて拒否された後、実行する計画を考えると、さすがに心がチクリと痛むのです。

《役（えん）の行者》直伝の秘術…。その習得と準備のために約

1年6ヶ月もの時間がかかりました。

「インドへ鉢を探しに行った」フリをするためには、丁度良い時間つぶしになりました。

その間に「鬼神を操り、鬼道によって、人心をたぶらかす危険人物」と朝廷から恐れられ、

遠い伊豆大島へ島流しにされた、役（えん）の行者こと、役小角（えんのおづの）は、亡くなりました。

熱心な信者と弟子たちに、静かに看取られながらの大往生。享年72歳でした。

その行者様が、皇子のために、最後に伝えてくれた秘術です。絶対、失敗する訳にはいきません。

失敗すれば、多くの人を死に至らしめる、危険な術だと、行者様からも念を押されていたからです。

緊張した汗が、こめかみから顎へ伝い、膝上で握りしめた拳の上に落ちました。

奥座敷では、錦の袋から出された石鉢が、かぐや姫の前に置かれました。

鉢の中には、お香を焚き染めた、一片の木簡が添えられています。

木簡とは、メモや手紙代わりに、文字を書いた薄い木の札です。

当時、現代のメールやツイッターのように、もっとも利用された通信手段でした。

そこに、歌が一首、流麗な筆使いで、したためられていました。

海山の 道に心を つくし果て ないしのはちの 涙ながれき

（ 海を越え 山を越え 果てしない道に 身も心も尽き果てて 血の涙を流しました この石の鉢のために ）

石鉢探しに、自分がどれだけ苦労したか、切々と訴える歌でした。

けれど、かぐや姫は、そんな歌に1ミリも心を動かされた風もなく、

「押しつけがましいヤツっ！」と、ホンネを声に出す事もしませんでした。

ただ、反射的に木簡をぽいっと、床に投げ捨ててしまいました。

オキナは、あわててそれを拾い上げました。

次に姫は、肝心の《御石の鉢》を手に取って、目の高さまで持ち上げていました。

真贋の手がかりとなる「紺青（こんじょう）色」の光を求めるかのように、

ためつすがめつ眺めていましたが、すぐに飽きて、鉢をゴトリと床に落としました。

オキナは、また、大あわてでそれに飛びつき、まじまじとキズの有無を確認しました。

顔を上げると、かぐや姫が、いかにもガツカリした顔をしていました。

「本物では、なかったのですか？」

オキナが尋ねても、姫は答えません。

かぐや姫は侍女に、返歌を書く木簡を用意させ、

「蛍ほどの〜光も〜ない〜なんて〜」

と、適当なアリア風八ノ歌にのせ、筆をさらさら走らせました。

おく露の 光をだにぞ やどさまし をぐら山にて 何もとめ

けむ

(草の葉の 露ほどの光も 宿らない石の鉢 ほの暗い山に籠
もって いったい何を探してらしたのかしら)

返歌を書き終わると、墨が早く乾くように、パタオタ煽いだり、
ふうふう息をかけて、

仕上がった木簡を、オキナの抱えた石鉢の中に、ぽーんと放り込
みました。

姫の歌を詠んだオキナは、嫌な汗をダラダラと流して、客間へと
引き返して行きました。

オキナの後ろ姿に目もくれず、かぐや姫は、残酷な笑みを浮かべ
てつぶやきました。

「ニセ鉢作戦は、バレバレよん。さあ、この後は、どう来るのか
しらん」

かぐや姫の返歌を読んだ、イシツクリの皇子は、背筋がゾツとし
ました。

「私は、見透かされているっ！ なんだ。コレは！ 監視されて
いたのかっ？」

歌は、ニセ鉢の指摘以外にも、皇子が山に籠もって「別のモノ」

を探していた事をほのめかしています。

「まさか。ははっ。偶然だろ？」

心臓が高鳴り、毛穴という毛穴から汗が吹き出しました。

どうしよう。プランBを決行すべきか、否か。

「ひょっとして、行者様の秘術の事もバレているのか？」

せつかく習った行者様直伝の秘術を、無駄にして良いものか？

「やるか、やらないか」の間で、心の振り子が大きく揺れました。

そこで皇子は、かぐや姫の本心を探るために、もう一首、歌を返しました。

しら山に あへば光の うするかと はちを捨てても たのま
るるかな

（ 白銀に輝く白山のような あなたの前では どんな光も薄れ
ましよう

恥を捨て 鉢を捨てても あなたの情けを 頼みとする わた
しの思いは捨てられません ）

しかし、客間で待てど暮らせど、かぐや姫からの返歌は、返ってきませんでした。

聞く耳を持たない相手に、これ以上、何を言っても無駄でした。

「交渉決裂……って、コトか」引きつった笑いを浮かべた、皇子の目に、暗い影が宿りました。

皇子は、帰路につきました。オキナは、申し訳なさそうに、その後ろ姿を見送りました。

しかし、その時、オキナは気づきませんでした。

門の影に置き去りにされた、二セの石鉢に。

ウソがバレても、なお、未練たらしく、言い寄ろうとする皇子のような、厚顔無恥な行動を、

以後、「はちを捨てる」と言うようになり、やがて「恥を捨てる」と変化して、現代にも伝わっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9254n/>

現代語訳 竹取物語

2011年9月15日11時24分発行